

宗教観と教条主義的傾向との関連について

高木 秀明*・安藤 嘉奈子**・山口 陽子***・井上 果子*

The Relation between the Religious Belief and the Tendency of Dogmatism

Hideaki TAKAGI, Kanako ANDO, Yoko YAMAGUCHI, & Kako INOUE

Abstract

This study investigates the relation between the religious belief and the tendency of dogmatism among the Japanese adolescents. 248 subjects responded to the questionnaire. According to their responses concerning attitude and interest towards religion, the subjects were divided into 6 groups. Results show that anti religion adolescent group tended to be more dogmatic.

目 的

Rokeach (1954,1960) によれば、教条主義 (Dogmatism) とはある信念を固持し、自己の信念体系の支えとなる権威を賛美し、自らの信念と異なる信念、即ち「非信念」に対しては全く非寛容であるという、心の硬直性と特徴付けられる。彼は教条主義の基礎となる態度を「閉ざされた心 (closed mind)」, 教条主義とは逆の態度を「開かれた心 (open mind)」ととらえている。

さて、本研究では青年期を対象として、教条主義と宗教観との関連を探ることを目的とし、以下のような仮説を立て調査を行なうこととした。

- (1) 青年期では、被験者の持つ宗教態度の違いによって宗教観はもちろんのこと、教条主義的傾向にも差異がみられる。
- (2) 青年期では、熱心な宗教態度を持つ被験者と宗教に反対する態度を持つ被験者は、他の宗教態度を示す被験者よりも教条主義的傾向が強い。

* 心理学教室 (Dept. of Psychology)

** 横浜国立大学非常勤講師 (Part-time Lecturer of Yokohama National University)

*** ノエビア (Noevir)

- (3) 青年期では, 同じ宗教態度を示す被験者群の中でも, 教条主義的傾向の高, 中, 低の違いによって, 宗教観に差異がみられる。

方 法

1. 調査尺度

まず, Rokeach (1960) の6件法, 66項目の教条主義尺度D版 (Dogmatism scale) について邦訳し, 翻訳の資格を持つ方にチェックを依頼した。これらの項目について, 1995年11月に国立大学生男子51名, 女子50名, 計101名 (平均年齢21.3歳, Range18~25歳) を対象に予備調査を行なった。Rokeachが教条主義尺度を1次元の尺度として作成したことを考慮して主成分分析を行ない, 第1主成分の重みが.30以上の29項目を選定し, これを本調査で用いた。

また, 教条主義尺度に加えて, 宗教態度により被験者を分類するため, 高木・吉田・森 (1987) の六肢択一式の宗教態度質問項目を一部修正して用いた。

さらに, 高木・吉田・森 (1987) の6つの下位尺度から成る47項目の宗教観尺度のうち, 5尺度39項目を4件法で用いた。

2. 調査期間・調査方法・調査対象

調査期間は1995年11月から12月にかけてである。調査方法は, 大学の講義時間に一斉調査を行なう形式と, 既成の宗教団体に属する青年期の信者に質問紙を個別配布する形式で実施した。調査対象は青年期男女で, 有効被験者数は男子136名, 女子112名, 計248名, 平均年齢21.8歳 (Range18~26歳) であった。

結果, 及び考察

1. 尺度の検討

結果の分析にあたる前に, 尺度の検討を行なった。

教条主義尺度の1次元性の再確認のため, 主成分分析を行なったところ, 第1主成分の重みの低い項目が出たため, 重みが.30以上の21項目を採用することとした。 α 係数は.82であった (表1)。

表1 教条主義尺度(21項目)の項目内容

-
11. 私のことを侮辱し、悪く言っている人がいる(.68)。
 4. 時々私は知らない人から冷たい目で見られているような気がする(.62)。
 9. その人の主張が気に入らないために嫌いになった人が大勢いる(.60)。
 22. 我々の住んでいる世界は基本的に淋しい世界である(.57)。
 3. 人が私の本当の姿を知ったら私に失望するのではないかと思い、恐ろしい気がする(.52)。
 1. 私はきつと誰かに噂されている(.51)。
 18. 残念なことに、一緒に社会的、道徳的問題の重要性を話し合ってきた人々でさえ、現在起こっていることを真に理解していない(.51)。
 27. 最近書物に書かれている思想の多くは、論文として出版される価値がないものばかりである(.50)。
 12. 対立する勢力と妥協することは、たいていの場合、自分の属する側への裏切り行為となるので危険である(.49)。
 2. 私が信じている主義は、ほかの多くの人々のそれとは違う(.46)。
 15. 時々自分が全く駄目な人間であると思う(.45)。
 25. ほとんどの人が自分にとって何が良いことなのかを理解していない(.45)。
 26. 歴史上真に優れた思想家と言えるのは、ほんの一握りしかない(.44)。
 28. 議論が白熱してくると、私はいつも自分が言おうとすることに夢中になり他人の意見など耳に入らなくなる(.42)。
 8. 現在何が起こっているのかの判断は、尊敬できる人物の意見を聞くまで待った方が多い(.42)。
 13. 議論の最中に、相手が本当に理解したかどうかを何度も繰り返し確かめなくなる(.41)。
 16. 人間は誰でも何かしらやましい心を持っているものである(.39)。
 24. こんな時代では、対立する人や団体の主張する意見よりも、時には理想を同じくする人々の意見を警戒する必要がある(.39)。
 7. 集団内であまりに多くの異なった意見が許容されているような集団は、長続きしない(.36)。
 17. 全ての団体にとって言論の自由は最大の目的であろうが、ある種の政治団体にはその自由を制限する必要がある(.32)。
 21. 世の中にある様々な主張のうち、たとえある主張を信じている人達が「これは新しい主張だ」と言ったとしても、実は他と同じであるということがある(.31)。
-

[注] ()内の数値は主成分分析を行った際の各項目の第1主成分の重みである。第1主成分の寄与率は22.7%であった。

また、宗教観尺度について主因子法、Varimax回転による因子分析を行なった結果、解釈可能性を考慮して因子数を2とし、因子負荷量が0.5以上の項目を採用して、宗教観尺度の下位尺度と定めた(表2-1, 2-2)。各因子を「信仰を心の支えとして、豊かな日常生活を得る」因子(以下「心の支え」因子)、「宗教の弊害を指摘し、批判的に捉える」因子(以下「弊害」因子)と命名し、信頼性の確認のため α 係数を求めたところ、それぞれ、.93, .91であった。

表2-1 宗教観尺度の「信仰を心の支えとして、豊かな日常生活を得る」尺度 (16項目) の項目内容

-
- 32. 信仰することによって、お互いに助け合う気持ちを養うことができる (. 80)。
 - 16. 信仰心を持つことで、安らぎや幸せを感じることができる (. 78)。
 - 33. 信仰心は、心の拠り所や生きがいとなる (. 74)。
 - 37. 宗教活動を通じて信者同士のつながりができ、楽しさを感じることができる (. 73)。
 - 21. 宗教は、人の手に余る哀しみを和らげ、救いとなる (. 72)。
 - 30. 宗教は、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる (. 72)。
 - 24. 信仰心を持つことによって、人との交わりに我を出さず、和をもって接することができる (. 66)。
 - 1. 信仰心を持つことによって、心が洗われる (. 66)。
 - 17. 信仰とは、明るく楽しい家庭を築き、円満を保つことである (. 63)。
 - 19. 信仰心を持つことによって、生き物に対し、愛情が深くなる (. 63)。
 - 5. 信仰によって、自己を内省し、反省することができる (. 62)。
 - 15. 信仰とは、感謝する気持ちを学ぶことである (. 62)。
 - 8. 信仰心を持つことによって、自分の考えや主張を確立することができる (. 62)。
 - 12. 宗教活動には、活動そのものに一体感があり、充実感を得ることができる (. 58)。
 - 29. 宗教活動によって、皆で同じ体験を共有し、共感することができる (. 53)。
 - 22. 信仰は精神安定剤の役割をはたす (. 52)。
-

[注] () 内の数値は因子分析を行った際の「心の支え」因子の各項目の因子負荷量である。「心の支え」因子の寄与率は38.9%であった。

表2-2 宗教観尺度の「宗教の弊害を指摘し、批判的に捉える」尺度 (11項目) の項目内容

-
- 13. 信仰は、盲目的で、他を顧みない (. 80)。
 - 11. 宗教は偽善的である (. 77)。
 - 34. 宗教によって、思想が偏り、物事を客観的、科学的、論理的に見ることができなくなる (. 69)。
 - 10. 信仰を持つことは、他力本願で、消極的である (. 69)。
 - 20. 宗教組織は、強制的である (. 68)。
 - 9. 宗教活動は、生活を束縛する (. 66)。
 - 25. 宗教には、排他性や他への攻撃性、差別がみられる (. 65)。
 - 7. 宗教活動は金銭に結びつき、営利に偏りやすい (. 64)。
 - 23. 信仰は、形式的、一時的になりやすい (. 63)。
 - 28. 宗教は自信を失った人間の逃げ場となる (. 63)。
 - 31. 宗教とは、大いなる自然の力に恐怖した人間の自己防衛手段である (. 51)。
-

[注] () 内の数値は因子分析を行った際の「弊害」因子の各項目の因子負荷量である。「弊害」因子の寄与率は11.4%であり、「心の支え」「弊害」の両因子の累積寄与率は50.3%であった。

さて、「心の支え」因子は、宗教の日常における役割意識に基づいて構築された肯定的な宗教観に関するものであり、自己の宗教体験との関連があると考えられる。「弊害」因子は否定的な宗教観に関する項目であるが、「心の支え」因子と比べると、宗教の特質をやや客観的、観念的に評価する面が強いと考察できる。従って、2つの因子には単に宗教を肯定する因子、否定する因子という以上の意味があると言えるであろう。

さらに、宗教態度により因子構造に違いがないかを確認するため、信仰を持つ群と、信仰を持たない群とに分けて因子分析を行なったところ、大きな違いはなかったため、同一の尺度を使用しても良いものと判断した。

2. 宗教態度による教条主義、宗教観の違い

宗教態度の違いによる教条主義的傾向の差異をみるため、宗教態度別に教条主義得点の

平均値を算出して、1要因分散分析を行なった。その結果、5%水準で有意差が認められたため、Duncan法による多重比較を行なったところ、「反対」群は他の5群よりも有意に教条主義的傾向が強く、「関心」群が「熱心」群よりも有意に教条主義的傾向が強いことが示された(表3-1, 3-2)。

表3-1 宗教態度別の教条主義得点の平均値と標準偏差

宗教態度	N	Mean	S D
ひとつの宗教団体に所属し、熱心に活動している。 「熱心」	49	68.60	13.96
宗教団体には所属しているが、あまり熱心に活動していない。 「不熱心」	13	73.08	10.00
宗教団体には所属していないが、自分なりの信仰を持っている。 「自己流信仰」	17	72.65	13.59
宗教団体には所属していないが、宗教・信仰に関心がある。 「関心」	30	76.07	12.54
宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心がない。 「無関心」	120	71.80	11.31
宗教活動には反対である。 「反対」	11	86.09	13.71

表3-2 宗教態度別の教条主義得点に関する多重比較 (Duncan法)

宗教態度 (Mean)	熱心	無関心	自己流信仰	不熱心	関心	反対
熱心 (68.60)						
無関心 (71.80)						
自己流信仰 (72.65)						
不熱心 (73.08)						
関心 (76.07)	*					
反対 (86.09)	**	*	*	*	*	

[注] 宗教態度別の教条主義得点を求め、分散分析を行なった結果、5%水準で有意差がみられた (F (5, 234) = 4.19)。
* p < .05 ** p < .01

次に、宗教観尺度に関する分析を行なった。「心の支え」得点の平均値を算出して分散分析を行なった結果、1%水準で有意差がみられたため、多重比較を行なった(表4-1, 4-2)。「熱心」群は他の5群よりも有意に得点が高く、宗教を心の支えとする傾向が強かった。「反対」群と「無関心」群は他の4群と比較して有意に得点が低く、宗教を心の支えととらえる傾向は最も低かった。信仰や関心の度合いが強い程、宗教を心の支えとして考える傾向が強くなると言えよう。

「弊害」得点についても宗教態度別に平均値を算出して分散分析を行なった結果、1%水準で有意差がみられたため、多重比較を行なった(表4-1, 表4-3)。「反対」群は他の5群よりも有意に得点が高く、宗教を弊害の多いものにとらえており、「無関心」群や「関

心」群がそれに続いた。「熱心」群は宗教を弊害と考える傾向が6群中最も低くなっていた。信仰や関心の度合いが低い程、宗教を弊害としてとらえる傾向が高くなると言えよう。

表4-1 宗教態度別の宗教観の各下位尺度得点の平均値と標準偏差

宗教態度	「心の支え」得点			「弊害」得点		
	N	Mean	S D	N	Mean	S D
ひとつの宗教団体に所属し、熱心に活動している。 「熱心」	50	55.38	7.00	50	20.12	5.51
宗教団体に所属しているが、あまり熱心に活動していない。 「不熱心」	14	45.07	10.63	14	23.57	6.38
宗教団体に所属していないが、自分なりの信仰を持っている。 「自己流信仰」	16	45.00	7.27	16	27.44	6.46
宗教団体に所属していないが、宗教・信仰に関心がある。 「関心」	30	44.97	7.54	30	31.50	5.29
宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心がない。 「無関心」	120	38.08	8.28	120	32.48	5.72
宗教活動には反対である。 「反対」	11	35.45	7.29	11	37.09	5.04

表4-2 宗教態度別の「心の支え」得点の多重比較 (Duncan法)

宗教態度 (Mean)	反 対	無 関 心	関 心	自己流信仰	不 熱 心	熱 心
反 対 (35.45)						
無 関 心 (38.08)						
関 心 (44.97)	**	**				
自己流信仰 (45.00)	**	**				
不 熱 心 (45.07)	**	**				
熱 心 (55.38)	**	**	**	**	**	

[注] 宗教態度別の「心の支え」得点の平均値を求め、分散分析を行なった結果、1%水準で有意差がみられた (F (5, 235) = 35.78)。
** p < .01

表4-3 宗教態度別の「弊害」得点の多重比較 (Duncan)

宗教態度 (Mean)	熱 心	不 熱 心	自己流信仰	関 心	無 関 心	反 対
熱 心 (20.12)						
不 熱 心 (23.57)	*					
自己流信仰 (27.44)	**					
関 心 (31.50)	**	**	*			
無 関 心 (32.48)	**	**	**			
反 対 (37.09)	**	**	**	**	*	

[注] 宗教態度別の「弊害」得点の平均値を求め、分散分析を行なった結果、1%水準で有意差がみられた (F (5, 235) = 41.71)。
* p < .05 ** p < .01

3. 宗教態度, 教条主義を2要因とする宗教観の検討

次に, 被験者数の少なかった群を除き, 「熱心」群47名, 「無関心」群116名の2群の宗教態度の要因と, 教条主義得点の上位25%を高群, 下位25%を低群, その中間を中群とした教条主義の要因により, 宗教観の下位尺度得点の2要因分散分析を行なった。

「心の支え」得点では宗教態度の主効果のみが有意であった(表5-1, 図1)。

表5-1 「心の支え」得点の宗教態度別, 教条主義得点別の平均値, 標準偏差, 及び2要因分散分析の結果

	宗教態度・「熱心」			宗教態度・「無関心」			分散分析の結果		
	低得点	教条主義得点 中得点	高得点	低得点	教条主義得点 中得点	高得点	教条主義 F値	態度差 F値	交互作用 F値
N	19	18	10	30	57	29			
Mean	54.47	55.39	57.40	37.17	39.70	35.75			
SD	7.07	7.28	5.87	8.63	7.89	8.44	1.73	163.50**	1.39

** p<.01

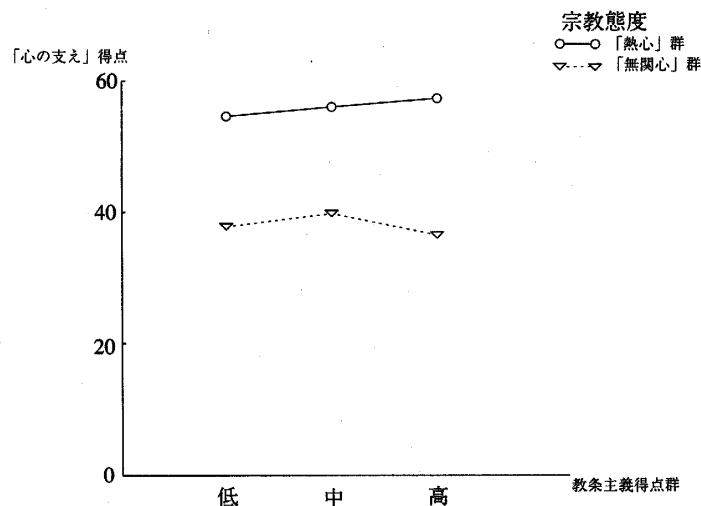


図1 各宗教態度の教条主義得点別の「心の支え」得点の平均値

「弊害」得点では, 宗教態度の主効果が1%水準, 教条主義の主効果と交互作用が5%水準で有意であった(表5-2)。さらに詳しく検討するため, 宗教態度別に教条主義の単純主効果の検定を行なったところ, 「無関心」群において1%水準の有意差がみられた。

Tukey法による多重比較によれば, 教条主義高群が中群よりも5%水準, 低群よりも1%水準で有意に得点が高い結果となった(表6-1, 図2)。また, 教条主義の得点群別に, 態度の単純主効果の検定を行なった結果, 高, 中, 低群ともに1%水準で, 「無関心」群が「熱心」群よりも有意に得点が高かった(表6-2, 図2)。「熱心」群では教条主義的傾向と宗教を弊害ととらえる傾向との間には関連がみられないが, 「無関心」群では教条主義的な傾向が強いと宗教を弊害ととらえる傾向も強いと言えよう。

表5-2 「弊害」得点の宗教態度別, 教条主義得点別の平均値, 標準偏差, 及び2要因分散分析の結果

	宗教態度・「熱心」			宗教態度・「無関心」			分散分析の結果		
	教条主義得点			教条主義得点			主効果 F値	態度差 F値	交互作用 F値
	低得点	中得点	高得点	低得点	中得点	高得点			
N	19	18	10	30	57	29			
Mean	20.10	20.50	18.00	30.30	32.05	35.55			
SD	5.03	5.55	6.32	5.13	4.85	6.74	3.44*	169.28**	4.41*

* p<.05 ** p<.01

表6-1 「弊害」得点における宗教態度別の教条主義の単純主効果の検定結果

宗教態度	F 値	多重比較 (Tukey法) の結果, 有意差が見出された対
「無関心」	7.23**	教条主義高群 > 教条主義低群** 教条主義高群 > 教条主義中群*
「熱心」	.72	

[注] 多重比較により有意差のみられた対の得点の大小は不等号で示した。すべてdf=2, 157である。

* p<.05 ** p<.01

表6-2 「弊害」得点における教条主義得点群別の宗教態度の単純主効果の検定結果

教条主義得点群	F 値	宗教態度別の得点の高低
高	76.61**	「無関心」 > 「熱心」
中	61.06**	「無関心」 > 「熱心」
低	40.43**	「無関心」 > 「熱心」

[注] 得点の大小を示すには、不等号を用いた。

すべてdf=1, 157である。

* p<.05 ** p<.01

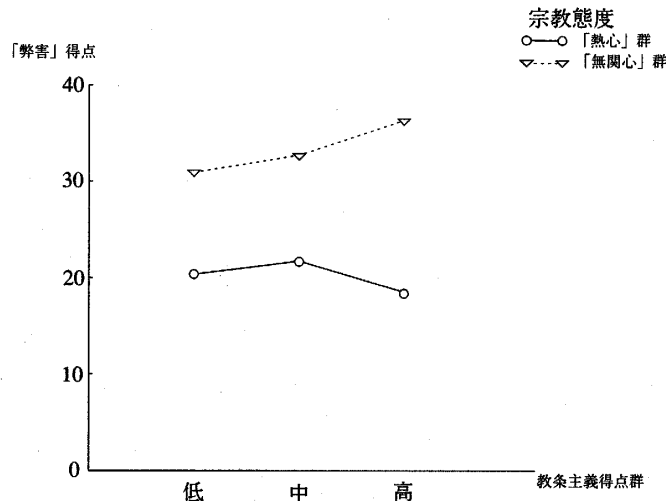


図2 各宗教態度の教条主義得点別の「弊害」得点の平均値

4. まとめ

全体のまとめを行なう意味で、宗教態度により分類した主な被験者群について、得られた結果とも照合させながら考察を加えたい。

まず、「反対」群は教条主義的傾向が他の群と比較して飛び抜けて高く、最も否定的な宗教観を持ち、仮説の一部が支持された。この群の被験者が明確に宗教反対の態度を打ち出しているのは、教条主義的傾向の強さゆえに宗教の意義を認めようとしなない硬い信念、「閉じられた心」を持っているためと考察できよう。

「熱心」群については、当初は「反対」群と同程度に教条主義的傾向が強いと予想していたが、「反対」群や「関心」群よりも有意に教条主義的傾向が低い結果となった。さらに、最も肯定的な宗教観を持ち、教条主義的傾向の程度による宗教観の違いもみられなかった。これらの結果からはRokeach (1960) の言う「開かれた心」で熱心に宗教に取り組んでいる様子がうかがわれたが、今回は被験者の所属する宗教団体が4つと限られており、得られた結果はその団体の特性を反映したものとも考えられる。また、調査を行なった年には宗教団体による事件が続発したと関連して、世間の宗教批判が強まっていた事情があり、この点も考慮する必要があるだろう。つまり、宗教に入れ込み、教条主義的傾向の強い人であっても世間体を慮り、調査の質問項目に答える際に自分のありのままの姿を報告せず、宗教にそれ程熱心ではないとか、教条主義的ではないように振る舞って偽りの回答をした可能性も否定できず、結果が歪められてしまった可能性があると言えよう。

次に、「無関心」群は信仰を持っている群よりは否定的な宗教観を持ち、「反対」群よりは肯定的な宗教観を持っていた。両者の中間にある存在と言えそうであるが、同じように中間的位置にある「関心」群と比較すると、「心の支え」得点は有意に低く、「弊害」得点には有意差がなかった。無関心という態度は、宗教を肯定も否定もしないという立場を示したのではなく、宗教に関心のある群と比べれば、多少否定的な意味合いのある宗教観を持っていると言えそうである。

さらに、「無関心」群について、教条主義得点の程度による宗教観の違いを検討した結果、「弊害」尺度では教条主義得点の高群が中、低群より有意に得点が高く、同じ宗教態度を持っていても、教条主義的な傾向の強さによって宗教観は多少異なることが示唆された。「心の支え」尺度では3群間に有意差がなかったが、これには宗教観尺度の下位尺度の性質が影響していると言えよう。「無関心」群は信仰を持っていないだけに、「心の支え」尺度のような日常的な宗教体験に裏打ちされた肯定的な宗教観は、教条主義的な傾向の程度にかかわらず持ち難くなり、「弊害」尺度のようにより客観的に宗教を批判する場合のみ、教条主義的傾向の強さが影響したのではあるまいか。

今回の調査では、宗教態度や宗教観と教条主義的傾向との間には関連がみられると示唆されたが、詳しい解析には至らなかった。特に「熱心」群については、再検討の余地を多く残しているであろう。

今後の課題

結果の分析を終えて、日本人の宗教観と教条主義的傾向の関連を検討するためには、日本人の宗教観の特色を十分に考慮する必要があったと再認識した。日本人の宗教観が一神教のものとは性質を異にすることは、多くの学者により指摘されている。湯浅（1981）は西洋のキリスト教では神は遠い存在という認識があるが、日本人の宗教観は神に対する親しさと表現できると述べている。平野（1982）は日本における神と人間の相互依存的な関係に着目し、神はまつられることを求め、人間は神に保護されることを求めていると考えた。山折（1983）は神と仏に対する日本人の感覚は一種の皮膚感覚に近いものであるとし、神と仏の相互補完的な関係が日本の文化や宗教を方向付けていると指摘した。彼らは一様に次々と新しい信仰の対象を受け入れてきた日本の歴史の特殊性に注目している。

確かに日本では、お宮参りや七五三には神社へ出かけ、結婚式はキリスト教会で挙げ、お葬式は寺院でするといった一見矛盾した行為を極当たり前に行なっているのが一般的である。このように、多種の宗教を寛容とも無関心とも言える態度で受け入れていることを考慮するならば、今回の調査でも、宗教態度を信仰の有無や関心の有無のみで分類するのではなく、被験者が完全に宗教否定の態度で行動しているのか、唯一の神や一人の教祖を絶対のものとして信仰する態度なのか、信仰や関心の有無にかかわらず日本的な多宗教容認の態度を示しているのかを明確にできるよう、宗教に関わる日常の態度や行動を細かく評定していく必要があったと考えられる。特に「熱心」群では、多種の宗教の相互補完性を受け入れつつ自らの信仰にも打ち込んでいるのか、1つの宗教のみを絶対とする態度なのかによって、教条主義的傾向が違ったのではないかと考える。

さらに、今回は教条主義尺度の妥当性に関する検討を行っていないが、この点についても丁寧に見てゆく必要がある。今回用いた尺度では、自分自身をも含めた人間全体や世界に対する不信感、敵意、孤独感といったものを多く測定しているように考えられる。1つの教義のみを絶対視し、他を退けるといった心の硬直性の一側面は、確かにこれらの項目によって測定されると考えるが、教条主義的傾向のすべての側面が測定されたとは言いがたい。教条主義の定義について再考した上で、尺度について詳細に検討してゆくことが不可欠と言えよう。

宗教に関する態度や行動に関して、前述したような観点から具体的に評定できるような工夫を行ない、教条主義尺度についての検討をも行なった上で、宗教態度や宗教観と教条主義的傾向がどう関連しているのかをみてゆくことが、今後の課題と言えよう。

引用文献

- 平野仁啓 1982 日本の神々 講談社現代新書
 Rokeach, M. 1954 The nature and meaning of dogmatism. *Psychological Review*, 61, 194-204.
 Rokeach, M. 1960 The open mind and closed mind. New York: Basic Books.
 高木秀明・吉田富二雄・森美奈子 1987 現代大学生の宗教意識 (1) - 宗教観尺度の作成 - 日本心理学会第51回大会発表論文集, 544.
 山折哲雄 1983 神と仏 講談社現代新書
 湯浅泰雄 1981 日本人の宗教意識 名著刊行会